

Risk prediction of severe reaction to oral challenge test of cow's milk

河原, 隆浩

<https://hdl.handle.net/2324/4784509>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	河原 隆浩
論文名	Risk prediction of severe reaction to oral challenge test of cow's milk
論文調査委員	主査 九州大学 教授 山浦 健 副査 九州大学 教授 新納 宏昭 副査 九州大学 教授 二宮 利治

論文審査の結果の要旨

わが国では、乳児期における食物アレルギーの有病率は約10%で、common diseaseであるが、未だに治療薬は存在しない。これまでは、食物抗原を完全除去し、寛解するのを待っていたが、現在食べられる範囲内で積極的に食べて治すようになってきた。しかし、食物抗原の摂取で全身性のアレルギー症状(アナフィラキシー)を誘発するため、専門病院で食物負荷試験を行い食べられる量(閾値)を決定している。

本解析の目的は、安全な食物経口負荷試験を行うために、牛乳アレルギー児を対象として、負荷試験の重症化を予測する予測式を作成することにある。

方法は、2011年から2017年に福岡東医療センターおよび福岡市立こども病院で行った1回目の牛乳負荷試験を行った児111人を対象とした。Sampson分類でGrade3以上の症状を誘発した児を重症群と定義し、重症群(28人)と非重症群(83人)に分類し独立した複数の因子を多変量ロジスティック回帰分析を行い危険因子を検討した。

牛乳特異的IgE値(オッズ比 11.61, $p = 0.001$), 牛乳の完全除去の有無(オッズ比 3.88, $p = 0.02$), 気管支喘息の既往の有無(オッズ比 3.75, $p = 0.02$)が独立した危険因子であった。この独立した3因子を用いた予測式は、感度86%、特異度56%の精度であった(カットオフ値25%)。この予測式は、安全な負荷試験を行うために有用であると考えられた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士(医学)の学位に値すると認める。